



## ハミング通信 009 号

いつも食べている自然栽培なのに、いざ、「自然栽培と有機栽培（オーガニック）ってどこが違うの？」などと質問されたら、いったいどう答えていいか、困ってしまう方も多いのではないのでしょうか。まず、最初に頭に浮かぶのは「農薬」のことでしょう。ハミングバードが定義している自然栽培では農薬（除草剤含む）は一切使用していません。一方で、有機栽培では原則、農薬は使いませんが、栽培に支障をきたすような病害虫が発生した際には、有機 JAS 法で定めた一定の農薬については使用しても良いということになっています。しかし、農薬の有無は、農薬を使用しなければならない事態になったという、現象面の話で、もっと本質的な話をするなら、「肥料」に着目すべきでしょう。自然栽培では「無肥料自然栽培」ともいうくらいですから、肥料は投入しません（有機肥料も化学肥料もいずれも無投入）。これは、山の木々が、肥料なんかなくても、豊かに育つのと一緒に、地中には今後、百年から数万年分の栄養素が存在していることが分かっているからです。だから、そこにわざわざ、大量の重油を使って化学肥料を投入したり、遺伝子組み換えやポストハーベストが心配な、輸入飼料を食べている牛の糞などの有機肥料を投入する必要はないよね。という考え方です。でも以前は「肥料も入れないで、作物が育つわけがない」と言われてきた時代もありました。しかし現在では、既成の事実として、これだけ多くの自然栽培農家さんが、立派な作物を作り、オランダなどの農業先進国でも「No Input Farming（自然栽培）」の野菜にファンが広がってきており、知識層を中心に、肥料の弊害が議論され始めました。実際、植物に肥料をやり過ぎると、窒素の吸収量が多すぎて、光合成が間に合わず、「硝酸」となって植物体内に残ります。これが「ニトロソアミン」という超発がん性物質を産みだしている可能性が指摘されています。さらには、硝酸がブルーベビー症候群（1950 年代にアメリカでハウレンソウの裏ごしを食べた複数の乳児が酸欠で真っ青になり死亡した）や糖尿病の原因だと指摘されています。大変面白いことに、放牧されている牛たちは、自分たちが糞尿を排泄した場所（糞尿がまだ未分解の場所）で、そこに生えている窒素過多の「濃い緑」の野菜は絶対に食べないのです。また、肥料の多投入の問題は、深刻な地下水汚染にも繋がっています。沖縄のある島では、おいしい井戸水が窒素過多で飲めなくなってしまい、高校生が市販のミネラルウォーターを持ち歩くようになりました。そもそも窒素過多の土は、作物に病気を招く。土や作物が不健康になれば、自然淘汰の役割の担い手として「害虫」が登場してくるわけです。だから、無農薬栽培の本質は「無肥料」にある！ 自然栽培においては、「無農薬」と「無肥料」は両輪でセットなのです。今回は、少し難しい話をさせてもらいました。でも、せっかく自然栽培を食べていただいている皆さんに、その本質を知っていただきたくて「肥料」の話をさせていただきました。ハミングバードでも、定期便「野菜セット」のお客さんが、「近所にオーガニックのお店がオープンしたので、今度からそちらの野菜にさせていただきます」という連絡をいただくことがあります。しばらく経ってから、また自然栽培の野菜セットを食べてみて「やっぱり全然違った」と言って、再度のお申込をいただきます。これは、前述の放牧されている牛と同じように、肥料（窒素分）なしの、すっきりとした気持ちのいいあと味が、忘れられないからだと勝手に思っているのですが、本当のところはどうなんでしょうか？

ハミングバード主宰 近藤正樹